

## ネエ ダンナサン あるいは 彼方から

### I Say, Sir, or From Far Away

阿 部 典 英

ABE, Norihide (Ten-ei)

この作品は『豊饒なる立体=阿部典英展』の一部である。

次の通り開催された。

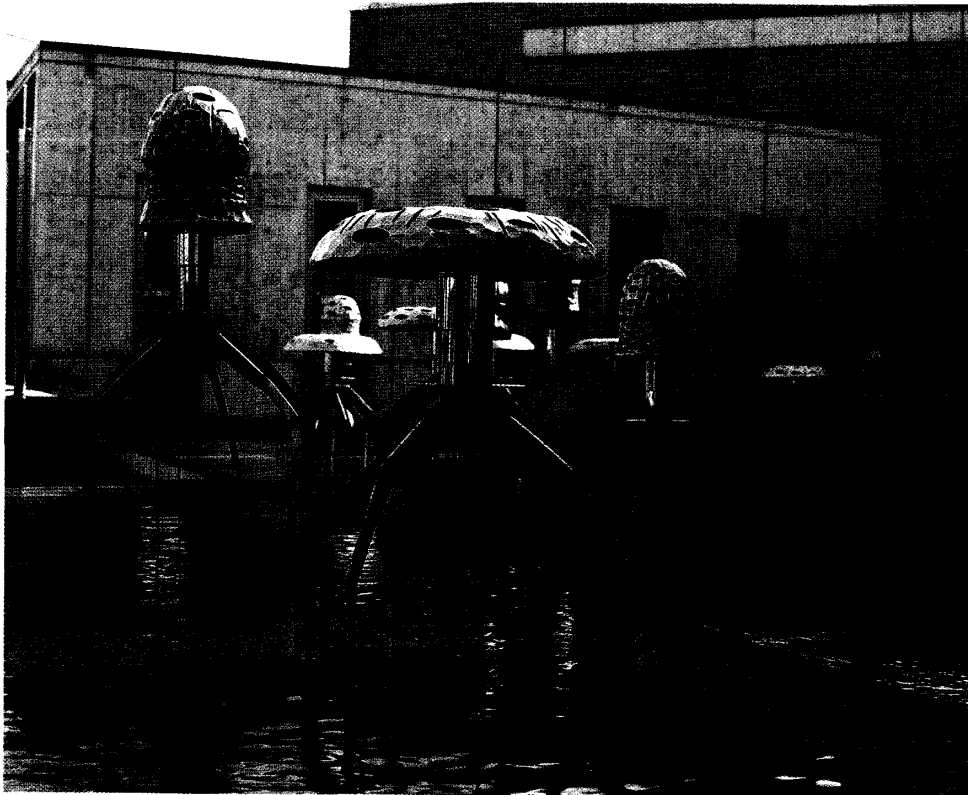
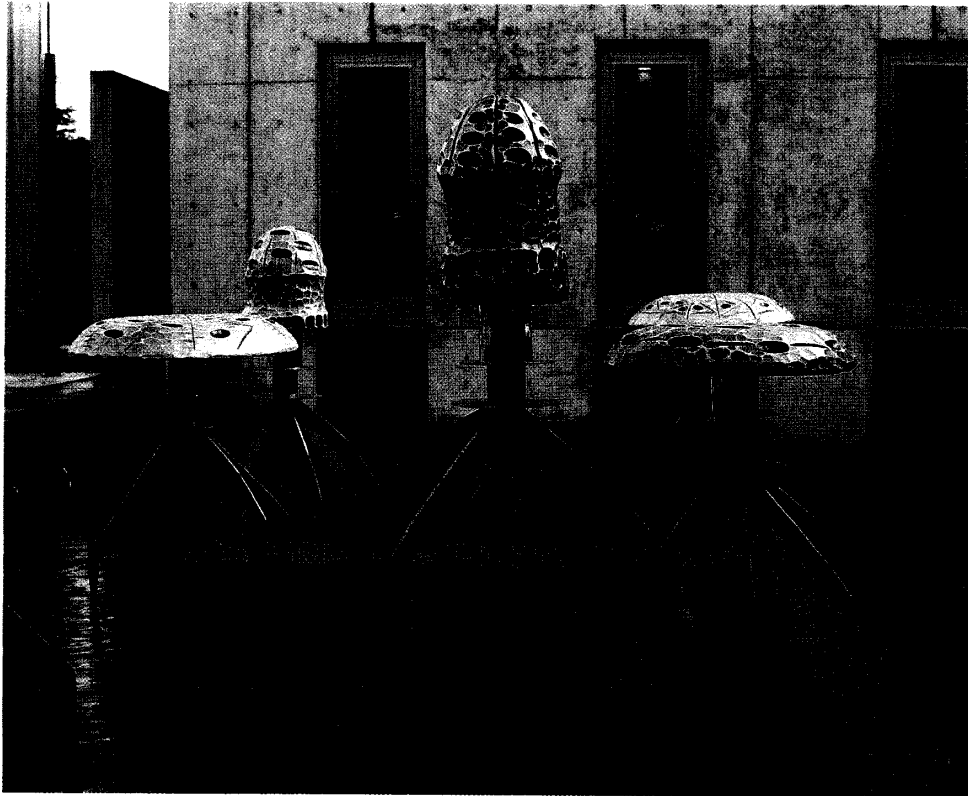
1. 日 時 2003年9月7日(日)~10月19日(日)

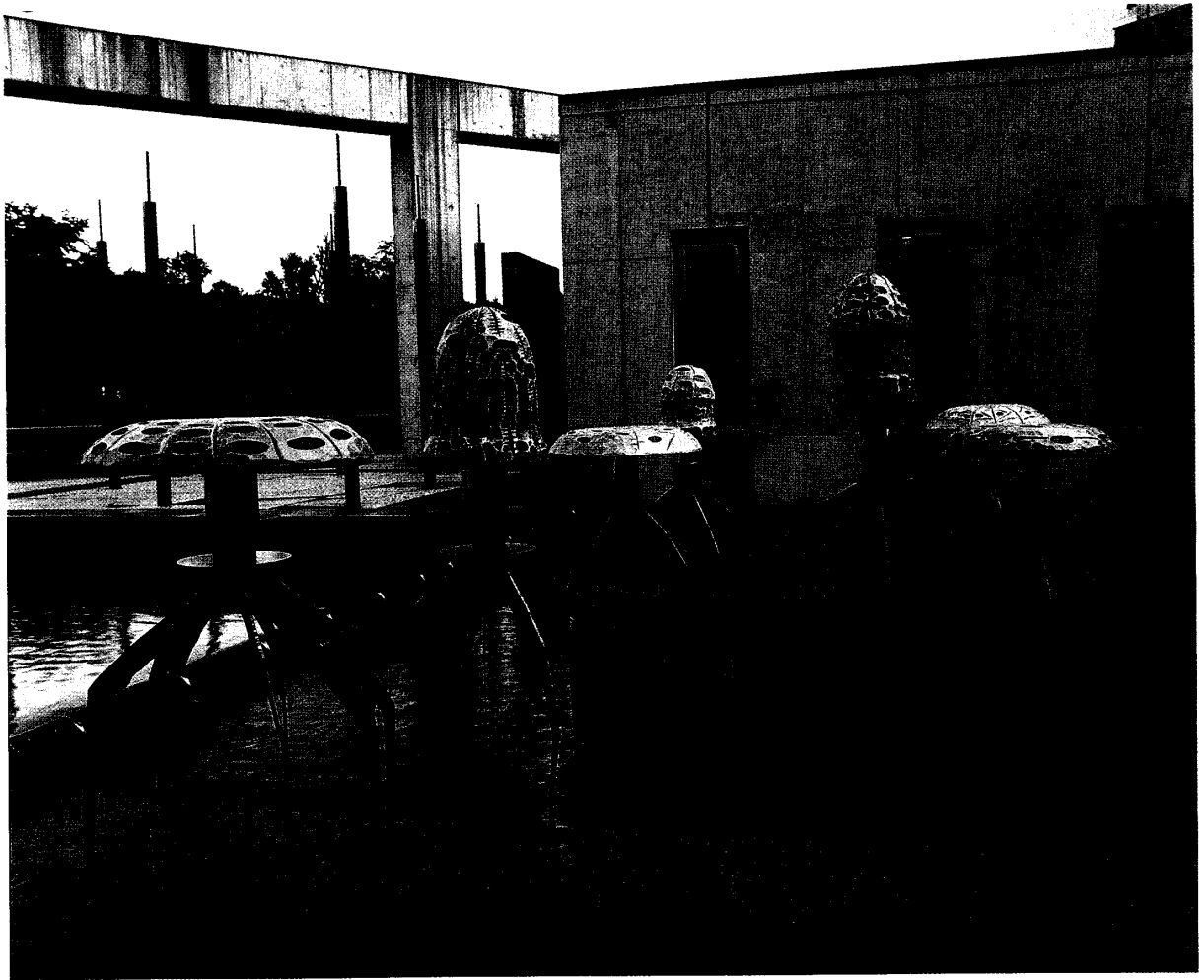
2. 会 場 芸術の森美術館

〒005-0864 札幌市南区芸術の森2丁目75番地

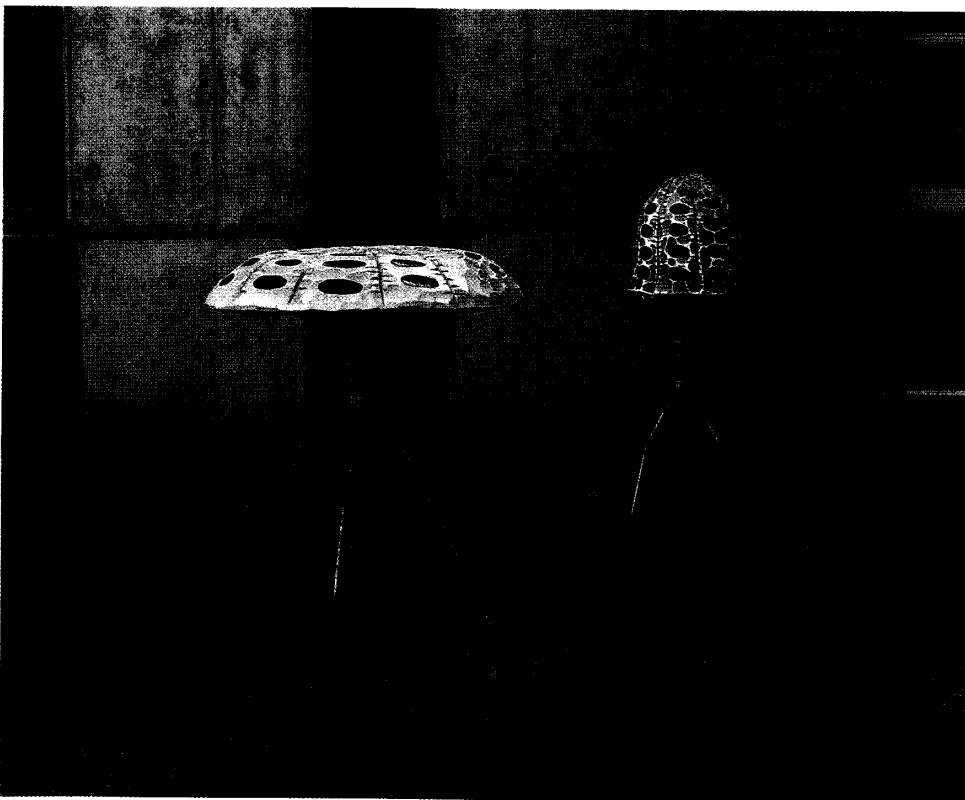


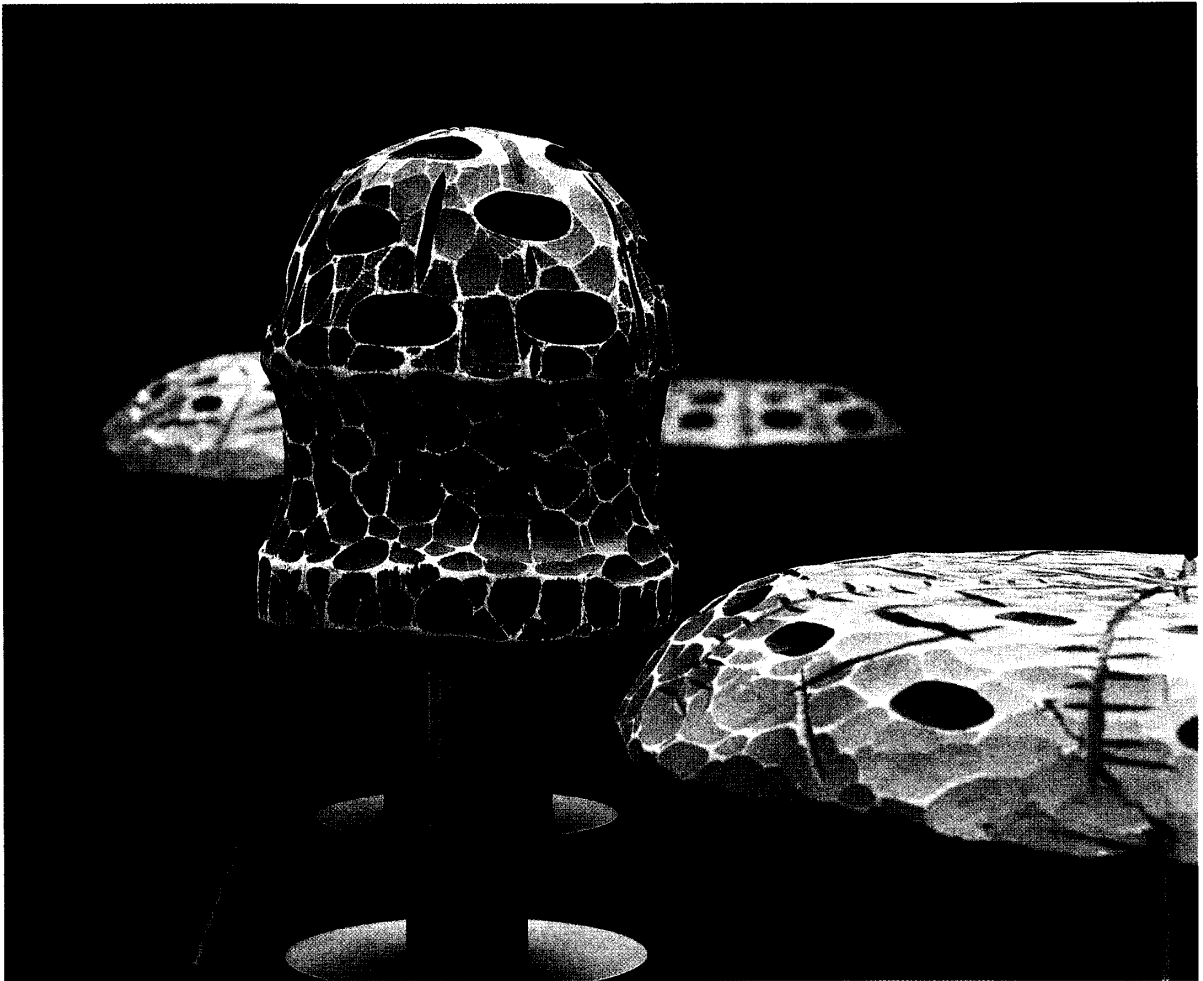
ネエ ダンナサン あるいは 彼方から (2003年作) Dimension : 173.5×91.0×82.0cm他 (12点組)  
(美術館入口より通路左側 池に配置) materials : 木、アクリル絵具、鉄、合成樹脂  
ステンレススチール、





芸術の森美術館前 前庭池より









芸術の森美術館前 前庭池より

## 『ネエ ダンナサン あるいは 彼方から』

今、ある文を読み終えたところである。G美術館学芸員のO氏のもので、概要は次の様なものである。

『自分は大学に入るために予備校通いをした。そのときに同じクラスにMという女性がいたが、1つのカリキュラムが終了すると講評会が開かれた。講師たちは知識のない予備校生にいつもこけ下ろす中でM娘の作品だけは称賛されていた。自分で見たらなぜ評価されるのか、形は狂っているし、構図は勝手気まま、色彩も扱い方がまずく、画面は汚れていて彼女自身の気持ちに素直なままに筆が動いているような気がして不快さはいつも拭えなかった。

自分は目的の大学に進学出来たが、M娘はダメであった。今20年以上経ったが、今日までそれから会ったことはないがようやくM娘の叫びというのか、気持ちが理解できるようになった。

それは当時の予備校生の目的は、大学に進学することと、正統な絵描きとなるべきの修行と考えていた。しかし、彼女は大学進学がすべてではなく、すでに駆け出しながらもすでに若い芸術家だったのではないかと考えられたからである。講師の目に止まったのは技術の習得ということに盲目になってしまっている予備校生の中であって、一人絵を描くことへの生き生きとした姿、そして現実的な進学だけ考えている姿とは別に、目に見える何かを描いた絵であるという具象性も超え、キャンヴァスの上で彼女自身絵を描くことへの生き生きとした「気持」を放っていた。それは彼女自身そのものになっていたという真実性を感じたからなのだと言える。そして、彼女自身のごまかすことのないリアリティがあると思ったからだ。』というものがあつた。少々長くなつたが言いて妙である。

父は菓子職人で、ソ連の捕虜から復員し、傾きかけた会社を引き受けたが2年も持たずに倒産した。そして再就職した菓子工場の社宅へ一家9人で住んだが、更に、父にどうしても弟子入りしたいという若者も一人加わつた。居間を含め3つしかない室の1つの6帖間の押し入れを改造し、3段ベッドにし、兄が上段、中段が自分、下段が彼で寝ていた。

私は高校を卒業し、すぐ、ゴム会社に就職した。現在取り組んでいる立体造形作品ではなく平面の絵画をおもに制作していた。夜になると窓から裸電球を出し、外の小路で描いていた。勿論、冬場は無理であったが、100号級の大作は殆ど『世界一天上の高いアトリエ』で描いていた。絵具は高いのでほんの少ししか使用できず、ラッカー、又は余つたゴム長靴に使用する塗料を自分なりに工夫し、ゴムを包んでいた『ナンキン袋』にゴム糊を塗りキャンバスとし制作していた。裸電球に集まる虫たちも画面に落ち、ラッカーに混じり込んでしまった。

何にも考えず、満天の夜空に浮かぶ星たちと共に、ただ絵を描きたいという『気持』で制作していた。

今もその『気持』を持って制作しているのだろうか。『彼方』へ行ってしまったのだろうか。その『気持』こそ忘れることなく『彼方から』引き寄せ常に自分自身の心底にしみ込ませ少年時代のような気持ちを持って制作したいと考えている。

幼い頃の一日は長かつた。現代の様に揃<sup>いま</sup>つた遊び道具は何も無くみな自分で造つた。



春は、ヨモギの若芽、セリ、タンポポ等の食料となる道端に芽を出した食べれる植物を摘み取り終わると『クギ刺し』で遊びははじまった。水気を含んだ地面の上に錆た五寸クギをピカピカに磨き空中から地面に刺す。その刺したクギあととクギあとを線で結び、相手の線を引くことをお互に阻止する様に狭く間隔を取る遊びである。冷たくドロコの手をポケットに突っ込んで汚し、母によく叱られたものだ。さらに缶詰めのフタの部分で作る『糸切り』もよく怪我もしたが男の子の遊びだった。

夏は体の裏表がわからないくらい陽に焼けて海に潜り、ガンゼ、アワビ、ナノを採った。殆んど昼飯は、これらで賄っていた。しかし、海はお盆を過ぎると急に水温が下がり潜ることは出来なかった。それから魚釣りが始まる。ハチガラ、アブラコから秋になるとハゴトコ、ホッケ、カジカとなる。釣りでの思い出は釣り針の縛り方がわからず、ホッケが釣れても針に結んだテグスが解けてどうしても釣り上げることが出来なかったり、ハチガラが超大物で、岩穴からなかなか出てこずようやく釣り上げたが、祖父も驚く程のものであった。

秋ホッケは産卵の為、群がって岸边に寄ってくるため、テンテンという方法で獲った。鉛を溶かし、それに大きな釣り針を3本入れ、太い綿糸に付け、旗竿を釣竿に使い荒海に投げ入れモッコを背負って釣るといふより、引っ掛けて獲るようなもので豪快なものである。海が荒れると越冬のためのマキ切り、マキ割である。これは小さい子供にとっては重労働であった。そんな中で手頃な丸太を輪切りにし車輪を作ったり木軸に通し、その上にミカン箱、又はリンゴ箱をのせ車を作った。弟、妹を乗せ石ころ道をゴロゴロ引張ったことも思い出す。又、ホタテの貝ガラに穴をあけ、紐を通して足に履き歩く『ガッパ』作りも楽しい遊びであった。

冬は、朝、昼、晩メシ用のイモの皮むきを、夜になると手籠一杯にしなければならなかった。

その後はストーブの周りに子供達が集まり、シラミ取りが始まる。特に下着の縫い目に隠れているシラミをコウコウと燃えるマキストーブで炙り出すのである。それを見付け、ストーブの上に乗せると血を吸って丸る丸る太ったシラミはパチンパチンと勢い良くはじけた。そんな中で竹ぼうきの柄を割り、竹スケートを作ったことも思い出す。先の部分を削り火に炙り曲げるのである。炙り過ぎ燃やしたり、折ったりとなかなかうまく出来なかったが成功した時はうれしく、馬ソリの通った坂道で滑り降りたことが鮮明に目に映る。

幼い頃の一日は、ほんとうにゆっくり、ゆっくりと過ぎていったが、今では一日が息を切らして走り続けている状態である。彼方へ行ったこんな原風景のしたたりを、北で生まれ育った者として、その証を『美術』(立体造形)という言葉で表現した作品である。中でも一番の原風景は疎開した後志の島牧村である。目の前は海、後ろは山、その間を狭い一本の道が通っていた。

腕白時代の原風景を彼方から引き寄せ、『節足動物』、『棘皮動物』、『軟体動物』からの造形的要素を抽出し立体造形として表現した作品である。

#### 参考引用文

美術ペン91 1997年6月20日発行 北海道美術ペンクラブ6頁